



五百旗頭真の 大災害の時代

第28回 [明治・昭和の三陸津波]

社会変化で復興に差異

1896（明治29）年の明治三陸津波は、日本史上最悪の2万人を超える犠牲者を出した。それは、文字通り最大規模の大津波である。2011年の東日本大震災と同列の犠牲者を出したのである。

なぜか、人々が逃げなかった最大の理由は地震が緩やかだったからである。震度2から3の弱震が長く続いたことを怪しんで津波を警戒した人もいたが、全く例外的である。

大地に何が起こったのか。明治三陸津波は、太平洋プレートが大陸プレートの下にもぐり込む沖合約2000kmの日本海溝に近づく海底で起こった。西プレートの接触域はゴツゴツの岩のように硬くなく、その周りの地震は激しい断裂のはね上げである。ゆっくりに揺れがしほへ続け性格のものとなりやすい。ただ最深1万4000mまで深く切れ込み日本海溝の陸地側には堆積物がたまって、この堆積物が地震の震動により深い海溝部へ動き、それが海水をさし動かす。地震動には不連続な大津波となった。近年の研究は、そのように明治三陸津波のメカニズムを説明している。

それに対して、1993（昭和18）年の昭和三陸津波は、日本海溝の外側の太平洋プレート内で起きた地震であり、それ相応の強い揺れと津波をもたらした。

貞観と明治の融合

一方、東日本大震災の震源は牡鹿半島沖1300mであり、海陸プレートの接触面（日本海溝）から70kmほど陸地に近づく、24kmの深さである。この辺りにもぐり込む海洋プレートに大陸プレートの一部がきりきりまで引き

ずられ、引きこぼしに引き寄せられたように激しい地震も同じ位置と性格である。明治三陸津波は、社会条件の大きな変化、危機対応と復旧・復興力の違いが示されている。

明治半ば過ぎの三陸沿岸は、また陸の孤島であった。海の幸が豊かなので、かなりの人口で、隣の村からの救援を求めずとも、その村も全滅状態だった。そんな中、津波の翌日、部長と遠野警察署長が調査し、消防夫八十余人を率いて釜石に到着し、同地は二鼓の勇気を待たされた。遠野が治部被災地を支えるのは、2011年に始まったことではないのだ。

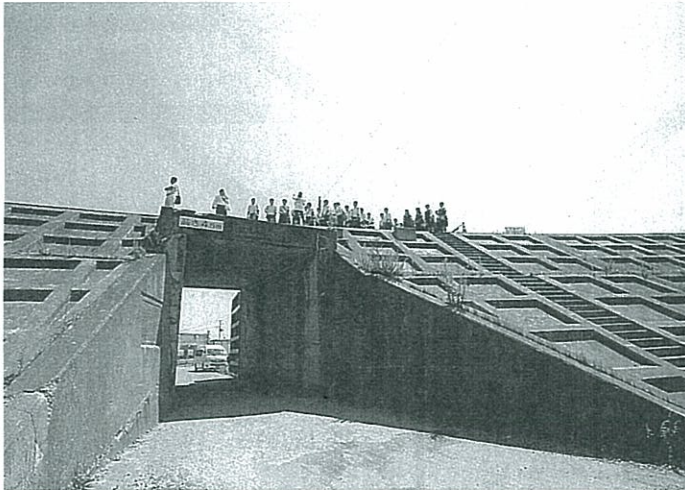
「田老は堪しと人は皆云へり。翌日に田老へ入った人は、人家と町が消え、単なる砂原と化した地を見た。泥砂が尻手だけが出ていたり、泥脚が突き立っていたり、頭が半分出ていたり、まるで人間の砂漠のようだった。野犬が群れをなして死体を食いちぎる」とし、哀れに思った人が追い払おうとすると逆に野犬に襲われた。地獄であった（『殿手県海嘯状況調査書』、「殿手公報」、前掲中央防災会議報告書）に所収。悲惨が広く知られ、県の要請を受けた政府や軍部が動き、医療や物資の支援、養老金も多く集まった。県と政府は、被災者

は、仙台からの支援が比較的迅速だったが、岩手県の被災地は通信も交通も寸断された孤立・放置状態だった。壊滅的打撃を受けた村や集落には、救出活動を行う無事の者がほとんどおらず、隣の村からの救援を求めずとも、その村も全滅状態だった。そんな中、津波の翌日、部長と遠野警察署長が調査し、消防夫八十余人を率いて釜石に到着し、同地は二鼓の勇気を待たされた。遠野が治部被災地を支えるのは、2011年に始まったことではないのだ。

絶望的事態に見えたこの地で、あるが、1年を経れば、漁獲も回復し、家の再建も急ぐツチであった。災害一過、雄奮高く、勤勉に建て直す列島住民の本性は、この明治三陸津波の場合にも生きていた。

最も悲惨な田老のケースを見よう。明治津波後、奇跡的に生還した名望家、扇田米吉氏が中心となって、①高所移転②防潮堤③山麓の地盛り④に、養老金を先手に着手した。が、住民の困窮にまず対処せよとの叫びが高まり、①②とも断念した。同じ地にまちが再建された。昭和津波でまた田老は全滅した。「500戸が移転できる高地は田老にない」と、関口松太郎村長は高地移転を否定し、防潮堤建設を決断した。960戸の第一堤が7年後に完成した。高さ10mであり、船の曲線のように津波を外へ受け流し、越堤する大津波には高台への避難を併用して対処するものとした。

ところが戦後、住宅が第一堤の外へ広がったため海岸沿いに第一堤を築き、X形の「万里の長城」となった。2011年の大津波は第二堤を壊滅させ、住宅と人々を海へ連れ去った。X形の中心点に集まった大津波は、第一堤の内部にも流入したが、堤は健在だったので、内部の旧市街は湖のように水に覆われたが、犠牲者は明治津波の10分の1以下にとまった（高山文彦「大津波を生きた」―巨天防潮堤と田老百年のいとなみ、山下文男・真田 三陸大津波）。



東日本大震災の津波は海面からの高さ12mの防潮堤を乗り越えた。岩手県盛岡市田老で、2013年8月22日、丸山博撮影。



明治三陸津波による被害状況。1906年の月報。

一人に1日米4台分の炊き出し費を30日間支給し、小農掛け（仮設住宅）費、そして流失家族に10円を備災費などから支給することを決めた。日清戦争の勝利後であることも幸いしたのである。1カ月半後には漁業の再建にも公費が投じられることになった。

絶望的事態に見えたこの地で、あるが、1年を経れば、漁獲も回復し、家の再建も急ぐツチであった。災害一過、雄奮高く、勤勉に建て直す列島住民の本性は、この明治三陸津波の場合にも生きていた。

最も悲惨な田老のケースを見よう。明治津波後、奇跡的に生還した名望家、扇田米吉氏が中心となって、①高所移転②防潮堤③山麓の地盛り④に、養老金を先手に着手した。が、住民の困窮にまず対処せよとの叫びが高まり、①②とも断念した。同じ地にまちが再建された。昭和津波でまた田老は全滅した。「500戸が移転できる高地は田老にない」と、関口松太郎村長は高地移転を否定し、防潮堤建設を決断した。960戸の第一堤が7年後に完成した。高さ10mであり、船の曲線のように津波を外へ受け流し、越堤する大津波には高台への避難を併用して対処するものとした。

ところが戦後、住宅が第一堤の外へ広がったため海岸沿いに第一堤を築き、X形の「万里の長城」となった。2011年の大津波は第二堤を壊滅させ、住宅と人々を海へ連れ去った。X形の中心点に集まった大津波は、第一堤の内部にも流入したが、堤は健在だったので、内部の旧市街は湖のように水に覆われたが、犠牲者は明治津波の10分の1以下にとまった（高山文彦「大津波を生きた」―巨天防潮堤と田老百年のいとなみ、山下文男・真田 三陸大津波）。